



学校法人 城西大学・理事長
 のりこ

水田 宗子

自分たちが生きない時代を 生きる若者を育成するための 豊かな想像力と広い視野を

私の視点 — 課題をこう捉える —

米国の大学で痛感した リーダーシップの重要性

編集部：フルブライト奨学生としてアメリカに留学された後、アメリカの大学で教員を務められたそうですね。

水田理事長（以下水田）：1961年から83年まで教えていました。アメリカの大学には70年代頃から18歳人口減少による「冬の時代」が訪れ、多くの大学が経営危機に追い込まれていました。

学部の廃止、新しいカリキュラムの構築、女性学や老人学といった新しい教育プログラムの開発、教育目標や

教員業績評価、成績評価の見直し、コミュニティカレッジをはじめとするさまざまな高等教育機関との共存など、生き残りを賭けた壮絶な改革期にあったのです。社会的評価を獲得するために、教員が率先して草刈りをする姿が強く印象に残っています。

これらの改革は政府主導ではなく、個々の大学が競争をする中で進められました。競争に勝つには、大学教育におけるイノベーションを生み出さなければなりません。そのために重要なのが、学長のリーダーシップだと痛感したものです。

世界で役立つ人材の 育成が求められている

編集部：日本の大学は、世界から何を求められているとお考えですか。

水田：今、日本は少子高齢化とグローバル化という大きな転換期にあります。これから先は生産人口が減少しますし、「上司が外国人」という企業も当たり前になります。これは予見できたことであり、教育機関が積極的に対応しなければならない課題です。しかし、必要に迫られないと考えない日本人的感覚が遅れを招いています。単に

英語力や内向き志向といった問題ではなく、日本の学生に「世界の中の日本」を理解させる教育をしっかりと行うという、根本的な課題に取り組むべきでしょう。

少子高齢化とグローバル化の中で、日本だけで何でも対応できるという理想と幻想が崩れて、日本は小さな国であることを自覚しなければならなくなりました。そのうえで、日本固有の文化を発信し、新しい技術を開発できる人材を、他国と協同して育成することも必要です。一方、世界の学生がどの国で学ぶかを選択する時代でもあり、「日本発の教育」が日本だけでなく、世界の人材育成にどれだけ役立つかも問われ始めています。

今、アメリカでは、世界経済のリーダーシップをとれなくなった影響が大学に出始めています。かつては潤沢な

奨学金で世界から学生を呼び込み、グローバル人材の育成に注力していました。しかし最近、アメリカの大学を訪れると、「Go Global!」と書かれた掲示物がよく目に入ります。学生を何人留学させたかを競争しているのです。

どの国の大学も、世界的な問題を解決できる人材を育成するために多様化を求められています。インターネットを使った無料の講座配信などの新しい試みは、大学という学びの場が人材育成に果たし得る役割を問い直していると言えるでしょう。

日本の大学も、世界の中でどのような人材育成が受け入れられ評価されるのかを、世界の大学と競争しながら考える必要があります。国際人としての教養を身に付けさせる教育にシフトしなければならないでしょう。私たち教職員は、自分たちが生きない時代を生

きる若者を育成しているのだから、自分たちの狭い想像力とビジョンで教育をしてはいけません。

編集部：大学のガバナンスにおいて、何を重視すべきだとお考えですか。

水田：一つは、情報の公開性を高めることです。出たくない情報があったとしてもそれに向き合い、反省することによって改善をめざすことができます。世界の共通言語は数値だと思います。客観的な数値情報として、大学の良さや課題を世界に示せば、見る人がそれらを評価できます。

もう一つは、学長がリーダーシップを発揮できる環境の整備。首相が組閣をできるように、学長は副学長や学部長を選任できるようにするのが当然でしょう。優れた学長のリーダーシップに基づいて、次の時代を生きる若者のための教育を行うべきです。

城西大学・城西国際大学の改革

創立 50 周年を迎え 中期目標を策定

編集部：2015年に創立50周年を迎える貴法人の改革についてお聞かせください。

水田：50年間の信頼と評価をふまえ、幅広い教養と深い専門性で問題解決にあたる国際的な人材を育成すべく、「日本、アジアそして世界のリーディング・ユニバーシティへ」をテーマとした中期目標「7つのJ-Vision」を策定し、現在、進行中です。

私立大学は自身の努力に加え、学生、企業などのさまざまなステークホルダーによって支えられています。建学の精神に根ざし、地域・社会、時代

に向き合った教育を行わなければなりません。そのため、J-Visionには、グローバル教育を行う大学でありたいという思い、地域や世界との連携を強固にするという決意を、建学の精神「学問を通しての人間形成」の今日にお

る解釈として織り込んでいます。

創立者である水田三喜男は、5度にわたり大蔵大臣を務めるなど、戦後の復興に深く関わる一方で、日本の将来の発展には教育が必要であると考えて、城西大学を設立しました。開学に

■中期目標「7つの J-Vision」

◀J-Vision▶により、日本、アジアそして世界のリーディング・ユニバーシティへ

1. 豊かな人間性の涵養と社会に有為な人材育成
2. 国際性、専門性を備え、日本文化を身につけたグローバル人材の育成
3. 教育力の持続的向上と地域・世界と直結した連携教育の強化
4. 研究力強化とイノベーションの推進
5. キャンパス環境の充実とグローバル化・ネットワーク化
6. 教育、研究、社会貢献のダイナミックな展開を支える経営基盤の確立
7. 発信力強化と社会的存在価値のさらなる向上

際して「学問はそれ自体が目的ではなく、あくまでも人間形成の手段である」という言葉を残しています。研究・開発は研究所や企業でもできますが、人間形成の支援は大学の大切な役割の一つです。それを突き詰めて、国際人とは何かを考えることを、国際教育の基本にしたいと考えています。

日本では少子化が進んでいますが、地球全体で見ると人口は爆発寸前です。地球規模で考え、持続可能な世界をつくる人間を育成しなければなりません。そうした人間を、学問を通して育成するという基本に返る意思を、中期目標に込めました。

120を超える 海外の大学と提携

編集部：どのようにグローバル人材を育成していますか。

水田：留年しなくても長期留学が可能な海外教育プログラムを設けています。もちろん、夏期・春期の休みを使った短期プログラムも充実させています。

120を超える海外提携校がありますが、協定書だけの形式的な関係にならないように、地域と専門分野を考慮して積極的に交流しています。最近では特に、チェコ、ハンガリー、ポーランド、

スロバキアを中心とする中欧の大学と、学生や教員の相互派遣を活発に進めています。法人内の中欧研究所でも人材育成、学術交流、共同研究を推進しています。

城西国際大学では、卒業までの全ての授業を英語で行う教育プログラム「グローバルカレッジ」を設けており、海外からの留学生は無理なく単位を修得できます。今後は、英語でも日本語でもリベラルアーツの基礎を学べるしくみをつくり、他者との差異を理解し、協働できる人材を育てます。そのための国際的、学際的な教育を充実させていく考えです。

トップの横顔に迫る

文学者・詩人として

四ツ谷駅近くの雙葉中学校に通っていました。授業が終わった後、今は迎賓館になっている当時の国会図書館に、寄り道の許可をもらって通いつめたことが、文学者を志す原点です。

東京女子大学在学中、現代詩の会として後に多くの詩人・作家を送り出す『詩組織』（ぶうめらんぐの会）に参加して詩作を始め、アメリカ留学中には、評論も手掛けるようになりました。現在も詩を書き続け、2013年には『アムステルダムの結婚式』と『青い藻の海』の2冊の詩集を出しています。

国際的な詩人賞を受賞

スウェーデンのノーベル賞詩人であるハリー・マッティンソンの生誕100年を記念して2004年に創設され

た国際詩人賞「チカダ賞」を、2013年に受賞しました。このような名誉ある賞をいただき、大変、光栄です。

「チカダ」とは、1953年に出版されたマッティンソンの詩集『チカダ』から名付けられたもので、スウェーデン語で「蟬」を意味します。日本への原爆投下、水素爆弾の開発などが、この詩集の制作に大きな影響を与えました。この賞は、生命の尊厳を表現する東アジアの詩人が対象で、私は日本人として3人目の受賞者となりました。

これまで、多くの西欧の女性詩人との交流を続けてきました。国と国との衝突、軋轢は止むことはありませんが、人と人は心を通じ合わせ、絆を結ぶことができます。詩は同志と心を通わせるだけでなく、魂の在処を瞬間で探りあて、他者との出会いを可能にする芸術です。



2013年4月に開設された東京紀尾井町キャンパス3号棟、庭園テラスにて

みずた・のりこ ● 1937年、東京都で創立者である水田三喜男氏の次女として生まれる。東京女子大学文理学部英米文学科卒業。イエール大学大学院で博士を取得後、南カリフォルニア大学比較文学部准教授などを経て、城西大学女子短大部文学科教授、学校法人城西大学国際文化教育センター所長などを歴任。1994年城西大学学長、1996年城西国際大学学長。2004年から現職。専門は比較文学、女性学。詩人としても活動。